

二学会合併「日本酸化ストレス学会」発足開催

近縁学会の合併のニュースをお伝えします。本年6月9日に、「日本過酸化脂質・フリーラジカル学会」と「日本フリーラジカル学会」が合併しました。新名称は「日本酸化ストレス学会(Society for Free Radical Research Japan、略称SFRR Japan)です。推定会員数は約750名、理事長吉川敏一(京都府立医科大学)、副理事長小澤俊彦(横浜薬科大学)、庶務幹事内藤裕二(京都府立医科大学)、会計幹事寺尾純二(徳島大学)です。この学会は「酸素由来の活性種や各種フリーラジカルによる酸化ストレスに関する研究の進歩・発展に寄与することを目的」としており、機関紙として2007年の時点で40巻目のJournal of Clinical Biochemistry and Nutrition (JCBN)をもち、国際フリーラジカル学会(SFRR International)とそのアジア(SFRR Asia)の日本支部としての機能を備えています。会員は、合併がほぼ全員の希望であったため、それぞれの旧学会の会員がそのまま新学会の会員となります。年会費は理事と評議員が12,000円、一般会員が7,000円、学生会員が2,000円です。事務局は京都府立医科大学大学院医学研究科免疫内科学教室です。そして、発足後の第一回の学術集会は、これまでの通算開催数も数えて来年度に開催されます。

第61回 日本酸化ストレス学術集会

会期 2008年6月19日(木)～20日(金)

会長 吉川敏一(京都府立医科大学大学院・教授)

会場 京都市内の予定

旧学会には若き日の思い出がある方が多いと思います。簡単に歴史と合併の経緯をまとめますと、日本過

酸化脂質・フリーラジカル学会は6人の先生方、故八木国夫(名大医学生化学)、早石修(京大医化学)、吉川政己(東大老年医)、山川民夫(東大生化学)、山村雄一(阪大内科)、五島雄一郎(慶大内科)を発起人として1977年6月12日に「過酸化脂質研究会」として発足しました。事務局は八木先生が務められ、年1回の学会を重ね、本年2007年で第31回となります。この間多くの研究者を育て、過酸化脂質測定法としてのTBARSの正否論、体内で生成するのは脂質の酸化物が先かコレステロールの酸化物などの議論、生体内過酸化へのNOのかかわりの発見などで熱しました。そして1987年10月に、脂質過酸化にはフリーラジカルが深く関係しているという見地で、「日本過酸化脂質・フリーラジカル学会」と改名しました。

日本フリーラジカル学会は、1988年に国際フリーラジカル学会が日本で開催されたのを機にその日本支部として発足しました。設立発起者の多くが日本過酸化脂質・フリーラジカル学会のメンバーでした。そして、2001年に「磁気共鳴医学会」と合併しました。磁気共鳴医学会の設立は過酸化脂質研究会と同じころの1979年です。したがって、「日本フリーラジカル学会」は今年で第29回となります。この2つの学会は、類似の研究課題を論じていること、メンバーの半数以上が重なっていること、一方は機関紙をもち一方は国際機関としての地歩を持っているなどの点で、数年前から合併を希望する声が高くなりました。また、この数年、両学会の事務局は同じであり、会長・理事長も同じでした。そこで、本年めでたく合併、新発足が成立しました。

新学会の名称は旧日本フリーラジカル学会の英名と同じSFRR Japanですが、これは、新学会は名称を改めただけで研究成果を多く集積してい

る歴史ある組織だということを理解していただくために、国際的に広く認知されているSFRR Japanを用いたからです。

学会案内

私たちの学会JSoFFの国際会議ICoFF2007は11月28日(火)～12月1日(土)まで、国際京都国際会館で開催されます。登録締切りは8月末です。ホームページをご参照ください。
<http://www.ICoFF2007.com/>

また、ICoFFの前の11月25日(日)～11月28日(水)に同じ会場で、第3回ポリフェノールと健康国際会議(3rd ICPH2007)が開催されます。ホームページ<http://icph2007.umin.jp>で、ICoFFと同時登録が可能です。

第3回秋季国際食品素材/添加物展(ifa/HFE Kyoto2007)も11月28日～30日まで同時開催です。

<http://www.ifaJapan.com/jp/kyoto/outline/index.html>

関連学会

Biomarkers of Oxidative Stress in Health and Diseasesが、2008年1月16日(水)～19日(土)に、大阪の千里ライフサイエンスセンターで、二木鋭雄先生(ヒューマンシグナル研究センター)とMaria Kadiiska(米国NIH)を座長として開催されます。参加の早期登録および講演要旨の締切りは2007年9月30日です。ホームページ<http://www.senri-lc.co.jp/e-access.html>をご覧ください。

ILSI Japan 栄養とエイジング国際シンポジウムが2007年10月31日と11月1日に東京都渋谷区の国際連合大学のウ・タント国際会議場で開催され、サテライトシンポジウムが翌日の2日に開催されます。

2nd International Symposium on Translational Cancer Research Natural Products and Cancerが、12月9日～12日に、インドのLonavalaで開催されます。
<http://translationalcancerresearch.org/>

書評

「機能性食品の安全性ガイドブック」

(サイエンスフォーラム刊)

「機能性食品の安全性ガイドブック」が、津志田藤二郎、梅垣敬三、井上浩一、村上明の諸先生を編集委員として96名の専門家の執筆で、(株)サイエンスフォーラムから、A4判500頁で出版されました。本書は、これまでに生理活性が認知されている食品成分のほぼすべてを網羅し、また認可されている食品添加物も議論しています。生理活性は、糖、食物繊維、アミノ酸とタンパク質、脂

質、ポリフェノール・フラボノイド、カロテノイド・キサントフィル、含硫化合物などに分類し、その範疇に含まれる個々の物質、例えば糖ならば糖アルコールなどについて詳細に説明しています。さらに酵母、アロエ、ウコン、ブルーベリー、桑の葉、ノコギリヤシ、羅漢果、イチヨウ葉抽出物、キャットクロー、冬虫夏草、プロポリスなどの基原素材も議論しています。そして本書の重要な特徴は、すべてを科学的に、そして公平に論じていることです。好ましい機能性だけに言及しているのではなく、アドバースな作用、副作用、他の食品成分や医薬との相互作用による好ましくない影響、過剰摂取による弊害、偏食の危険性などを科学的に論じています。そしてこの正否両論の理解のために、前半の総説の章で、安全性の考え方、薬物との相互作用、安全性評価システム、リスクコミュニケーションなどの議論がまとめられています。また、後半の章

では、食品を扱う者の倫理としてもっとも重要な品質管理のために、混在物の分析法、好ましくない成分の検出法、さらに、機能性発現機構の解析から副作用を推定する最新手法まで紹介しています。機能性食品はヒトの健康増進に必須となりつつありますが、北米やオーストラリアでは機能性だけを取り上げたヘルスクレームが重視され、一方、歴史が古いヨーロッパや東洋では漢方的マイルドさが求められるという温度差があります。このために、国際流通社会の基準をCODEXレベルで共通認識しようという動きもあります。このように国内と国外の区別がなくなりつつある現状では、機能性食品は国際的に通用する科学的な証拠をもとに論じなければなりません。その意味で、本書は食に関わるすべての人に必須の参考書でありデータ集だと思います。 (定価：39,000円)